

史実篇

映画文学人生論

0861) 新史太閤記	司馬遼太郎 (1968)	「新潮社」
0871) 逆軍の旗	藤沢周平 (1976)	「青樹社」
0881) 栄花物語	山本周五郎 (1953)	「週刊読売」
0891) 花の生涯	船橋聖一 (1952-53)	「毎日新聞」
0901) 落日燃ゆ	城山三郎 (1974)	「新潮社」

歴史小説——歴史上に実在した人物を中心
にほぼ史実に即して書かれた小説

歴史上に実在した人物を主人公にしてほぼ史実に即して書かれた小説五篇を読んでみた。

新史太閤記	司馬遼太郎	(豊臣秀吉)
逆軍の旗	藤沢周平	(明智光秀)
栄花物語	山本周五郎	(田沼意次)
花の生涯	船橋聖一	(井伊直弼)
落日燃ゆ	城山三郎	(広田弘毅)

主人公は、豊臣秀吉、明智光秀、田沼意次、井伊直弼、広田弘毅。五人のうち豊臣秀吉は百姓の生まれで、猿と呼ばれてあなどられながら天下人となった英雄として講談でおなじみの人物。私も少年の頃から立川文庫などで知っている。

しかし、講談と小説はかなりちがう。司馬遼太郎の『新史太閤記』は講談の面白さをたっぷり含んでいるとはいえ、新しい史実をとりいれ、司馬史観で味付けした小説となっている。

新しい史実とは、たとえば、従来の太閤記では猿と呼ばれた少年が蜂須賀小六とが三河矢作橋で遭遇したことになっているが、その時代には三河矢作橋はなかったという。したがって、矢作橋で猿と小六が遭遇させるわけにはいかない。

また、「この猿ほど人を殺すのをいやがった男はいない」と司馬遼太郎は語る。たしかに木下藤



史実篇

映画文学人生論

吉郎と呼ばれていた頃の猿はそうだったかもしれないが、天下をとってしまった後の秀吉はむやみやたらに人を殺している。

しかし、『新史太閤記』は猿が天下をとるところで終わっており、猿が人を殺すのをいやがったという司馬史観はまちがいとまではいえず、きわどいところで成立しているといえよう。

その他四編の主人公には一般的史実では暗いイメージがつきまわっている。明智光秀は主君織田信長を殺した反逆者、田沼意次はワイロを横行させた腐敗政治の元兇、井伊直弼は安政の大獄で勤王の志士たちを死罪にした徳川幕府の大老、広田弘毅は日中戦争で軍部の暴走を抑止できなかった不作為の責任を極東裁判で問われた外務大臣。

この四人は講談の英雄にはなりにくい、小説では作者が主人公の人物やその行動に共感し、名誉を挽回するように描くことができる。結果的に主人公は不運な最期をとげるが、小説の読者はその不運に同情し、史実とはなんだと疑問を抱く、史実とは歴史学者などの間で一般的に事実と認められていることを指している。それは当時の文献や証言、物証などから事実とされるが、歴史は勝者の歴史であると言われるように、それらの証言や文献は必ずしも信頼できるとはかぎらない。何をもちて史実とするかは誰が判定するのか。

花落つる流れの末をせきとめて 里村紹巴